

Title	宗教はいかに社会化されるか：信者言語行動の分析を元に
Author(s)	山本，悠
Citation	令和元（2019）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書
Issue Date	2020-06
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75957
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2019年度大阪大学未来基金【住野勇財団】学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな氏名	やまもと はるか 山本 悠	学部 学科	文学部	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	BURDELSKI Matthew James	所属	文学研究科		
研究課題名	宗教はいかに社会化されるかー信者言語行動の分析を元にー				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
<p>【研究目的】</p> <p>本研究の目的は、キリスト教信者の宗教モラルティやアイデンティティが、宗教的活動を通していかに社会化されるかを考察することである。</p> <p>世界中の多くの人々の生活において、宗教は重要な位置を占めている。特にキリスト教は仏教、イスラム教と並ぶ世界三大宗教の1つであり、日本にもキリスト教信者が少なくない。文化庁の『平成30年度版宗教年鑑』によると、日本におけるキリスト教信者数は約192万人である。宗教と言葉に関する研究は複数見られるが、社会化の観点から考察を行ったものはまだ少ない (Fader, 2011; Moore, 2011 等)。人は家庭内の会話や学校教育、メディアの活動などを通じて様々な価値観を形成するが、その中でも日本におけるキリスト教信者の宗教的な価値観の社会化は、主に教会での活動と家庭での活動という限られた場で行われると考えられる。本研究では、教会内の聖書研究会での会話の観察・分析、信者・牧師へのインタビューを行い、キリスト教信者の宗教モラルティやアイデンティティがいかに社会化されるかを考察したい。</p> <p>【研究の背景】</p> <p>①言語社会化理論</p> <p>言語社会化理論は1980年代にアメリカの文化人類学者 Ochs と Schieffelin により提唱された理論である (Schieffelin & Ochs, 1986)。言語社会化とは社会への新参者 (子ども、第二言語の学習者、新入社員など) が、言語活動を通して社会・文化的規範を習得すると共に、それに基づいた適切な言語行動を獲得する過程を指す。Ochs (1990) は言語社会化には2つの側面があると述べた。1つは「言語使用への社会化(socialization to use language)」であり、適切な場面で適切な言語使用を選択できる能力を獲得するプロセスのことである。例えば、場面に応じて適切な敬語を選択できるようになるといったことがゴールとして設定される。もう1つは「言語使用を通しての社会化(socialization through the use of language)」であり、言語使用を通して社会規範、価値、言語イデオロギー等を獲得するプロセ</p>					

スのことである。例えば、人は敬語の選択を通して年上を敬うという社会文化を獲得することとなる。このように、言語社会化には2つの側面があると考えられる。すなわち人は相互行為の中で適切な言語使用を習得するとともに、モラリティやアイデンティティを習得しているといえる。

宗教と言語社会化について述べたものとして、Moore (2011)と Fader (2011)等がある。

Moore (2011) は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の宗教の授業を紹介し、宗教の社会化における聖典と反復の重要性を示した。そして、生徒は聖典のテキストを様々な方法を通して何度も反復することで、日常生活での信仰とモラリティを形成すると述べた。また、Fader (2011) は、アメリカのブルックリンに住むユダヤ教信者のモラリティの変容を考察した上で、モラリティの社会化は感情、主観の生成、社会的価値の再生産、および社会の変化の問題と関係するとし、宗教、世俗、および政治への価値観やその社会制度の構築に寄与すると述べた。そして、地域的なモラリティ、あるいは宗教的なモラリティを言語社会化の観点から考察することで、社会体制や政治体制の形成や変動を、人々がどのように受け入れるかを考察することが出来る可能性があると言った。

②神の人格化

宗教信者のモラリティやアイデンティティがいかに形成されるかを考察する前提として、神の人格化の概念が必要である。

Moore (2006, 2008)は、学校でのイスラム教育の事例を分析し、宗教教育を通して教師は生徒に神の言葉と聖職者を敬うことを教えているだけでなく、コーランの声に対する敬虔な態度と感情的な応答を行うことを教えていると述べた。つまり、イスラム教信者はコーランは単なるテキストではなく、敬意を表したり応答をしたりする必要がある、一種の人格として捉えられていることがわかる。

また、小栗献(2004, p.44)は『よくわかるキリスト教の礼拝』の中で以下のように語っている。

自分のことを正直に告白し、問いかけ、訴え、感謝を言い表し、そして願う。それはキリスト者の基本的な姿勢です。(中略)キリスト教信仰の基本にある人間理解は、人は神と人格的な関係を持ち得るということです。人格的な関係にあるのですから、私たちは対話し得る関係にあるし、また対話のパートナーとして言葉を聞き、それに言葉で応えることは当然のことなのです。

つまり、キリスト教信者にとって、神は目には見えないが確かな人格であり、対話が可能な存在であると考えられる。

宗教信者は、実際には目には見えない神を1つの人格として捉えた上で、「神の言葉を聞く」「神に応答する(あるいは語りかける)」といった対話的な行為を遂行している。すなわち、宗教信者にとって神と対話するための言語知識・言語使用法を習得することは、宗教活動を行う中で非常に重要な位置を占めていると考えられる。

③リサーチクエスション

先行研究では学校教育内での宗教授業の事例が分析対象となっているが、学校以外の制度的な会話の場、例えば教会内での会話を分析対象としたものは見当たらなかった。また、日本における宗教教育に関する論考も少ない。

以上を元に、2つのリサーチクエスションをたてる。

(1) 教会内の言語活動において、信者が神の存在への気づきをどう表現しているのか・神にどう語りかけるのか

(2) 以上の(1)に対して誰がどのように返答するのか

リサーチクエスションを踏まえ、宗教がいかにして社会化されるかを考察したい。

【研究計画】

今回関西地域にあるキリスト教会を訪ね、教会員の方々の協力を得て「聖書研究会における言葉のやりとりの分析」および「牧師・聖書研究会参加者へのインタビュー」の2つの手法を用い調査を行った。¹

①聖書研究会におけるやりとりの観察

聖書研究会は毎月第3日曜の午後に開催されている会であり、10代から40代の教会の青年会のメンバーが参加している。基本的には午前に行われる礼拝²の説教³に関連する聖書の箇所について、牧師が作成したプリントを元に、参加者たちで話し合い信仰を深める場として設定されている。ただし、11月17日の聖書研究会では礼拝の説教に関連する箇所とは別の聖書の箇所について話し合いがもたれた。以下、表1に聖書研究会参加者の概要を、表2に録画した会話データの概要をまとめる。

名前(仮)	年齢	職業	性別	出身	受洗期	備考
A	48歳	牧師	男	日本	10歳	クリスチャンホーム ⁴
B	38歳	公務員	女	日本	21歳	非クリスチャンホーム
C	29歳	会社員	男	日本	7歳	クリスチャンホーム
D	24歳	大学生	女	日本	13歳	クリスチャンホーム
E	21歳	大学生	女	日本	10歳	クリスチャンホーム
F	20歳	大学生	女	日本	10歳	クリスチャンホーム
G	20歳	大学生	男	日本	10歳	クリスチャンホーム
H	20歳	大学生	男	韓国	15歳	クリスチャンホーム

(表1：参加者概要)

録画日時	録画時間	参加人数	聖書箇所
2019/7/21	1:30:24	7名 (A,C,D,E,F,G,H)	マタイの福音書 10:24～33
2019/8/18	2:02:20	5名 (A,B,D,F,H)	マタイの福音書 11:1～19
2019/11/17	1:46:20	6名 (A,B,C,D,G,H)	詩篇 16:1～21

(表2：会話データ概要)

②牧師・聖書研究会参加者へのインタビュー

聖書研究会での会話データを観察した後、会話データには現れない、聖書研究会以外の時間での宗教との関わりについて更に探るため、インタビュー調査を行った。9月から10月にかけて牧師と聖書研究会参加者へ半構造化インタビューを行った。以下表3にインタビュー調査の概要をまとめる。

日時	録音時間	被調査者	主な質問項目
----	------	------	--------

¹ 調査方法については研究計画から一部を変更した。

² 礼拝は毎週日曜日に行われている。

³ 礼拝における説教は、毎週 YouTube にアップロードされており、本研究にあたってそれも参照している。

⁴ 「クリスチャンホーム」とは、両親がキリスト教信者である家庭であること。クリスチャンホームで育った人間は幼いころから教会に慣れ親しむ傾向がある。

2019/9/26	1:11:32	F (参加者)	<ul style="list-style-type: none"> ・ F と神様の関係性はどのようなものか ・ F にとって礼拝の時間はどのような意味を持つのか
2019/10/18	52:04	A (牧師)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 牧師として聖書研究会や礼拝において気を付けていることは何か ・ 信仰によって信者には何を実現してもらいたいのか ・ 牧師として教会をどのような場所だと考えているのか

(表 3：インタビュー調査概要)

なお、インタビュー調査はデータ分析では取り扱わず、考察にて取り上げる。

【研究成果】

①データ分析

聖書研究会は牧師が作成した設問を記したプリントを元に進められ、牧師の用意した各設問に対する見解を、参加者が 1 人ずつ順番に述べていく⁵。参加者の見解に対して、他の参加者が意見を述べ、連鎖的に会話が続く場合もある。

今回は、収集した約 4 時間 20 分のデータの中で、分析対象として、特に連鎖的な発言が活発であった 2 つの場面を取り上げる。データ 1 は、神の怒りという観点から、神から信者への働きかけが言葉を通して表現されている場面である。「神の存在を感じる言葉」という分析焦点で分析を行う。データ 2 は、神への敬語使用の是非という観点から、信者から神への働きかけを行う際の言語使用について意見が交わされている場面である。「神に語りかける言葉」という分析焦点で分析を行う。

(1) 神の存在を感じる言葉

データ 1 2019/7/21 録画 57:03～57:56

((「神の怒り」に関する見解の相違が起こった後の会話))

- 1 H: 俺は怒る時はもちろんは k () -怒られる時はもちろん(.)反抗するけど神様に
- 2 C: ° うん°
- 3 (0.5)
- 4 H: なんでやねんって(0.5)でもそれが過ぎてみたら俺のため(.)だったんですよね(4.0)
- 5 で: えっと: 神様: に(.)本当に怒られる(.)ってなっ t-なる瞬間って
- 6 俺救いを(.)救いから離れる(1.0)だと俺の中には思ってた(1.0)
- 7 神様の枝に(1.5)° >まあ俺の感覚でしかないんだけど° =
- 8 D: [° いいと思いますよ°]
- 9 C: [° うん°] うん
- 10 H: ° えっと° 神様の枝についている限りその(0.8)° えっと° おこり⁶(1.0)として表現される
- 11 もの全ては愛だったということ(0.5)を毎回そのおこりが(0.5)おこりだと思っていた
- 12 s-s-いたそのその瞬間が過ぎてから感じましたので
- 13 C: ° うん°
- 14 (1.0)
- 15 H: その(1.5)そう(.)なり(0.4)ます(0.4)ました俺の時(0.4)は(.)俺の場合はね

⁵ プリントに記載された設問の数は、7/21 と 8/18 の回は 2 問。11/17 の回は 8 問。

⁶ 「おこり」という発言は、前後の文脈から「怒り」の意味で発話されていると推測される。

1 行目で H は「神様が怒る」という表現を用いて、神からの働きかけを言語化している。そして続けて、神に怒られた時に自身は「反抗する」と、神からの働きかけに対して反応することも示している。更に、H は 4 行目で「神様が怒るのは自分のため」、10～11 行目で「怒りとして表現されているものは愛である」とし、神の行動と目的・意思との区別しその関連性を述べている。

また、H が 7 行目で自らの認識の個別的なものだと述べた際には、D はそれに対して小さな声で「いいと思いますよ」と述べ、肯定的な評価を下している。

以上のデータでは、信者は「神に怒られる」という表現を用いて神からの働きかけを言語化することで、神の存在を感じている。神の存在を感じた際には、それに対する応答を行うことも示されており、更には、神の思考や人格に対しての認識も示されている。また、それらの認識に対して、他の信者は肯定的な評価を示して反応している。

(2) 神に語りかける言葉

データ 2 2019/7/21 録画 52:32～53:38

((直前の部分で「神様をおそれる時はどんな時か」というテーマに基づき、自らの認識を語っている))

- 1 D : でなんかすごい：そっから派生して(.)勝手に気になったことなんだけど(0.8)
- 2 すごい神様は：めっちゃ一番自分にとって(.)身近な存在で(.)二十四時間どこにいても
- 3 自分がどんな状況でも話しかけられるのってイエ sー神様だけだと思うけど(0.5)
- 4 そんな一番身近な存在に対して(.)お祈りって絶対敬語で(1.5)敬語だなんて＝
- 5 H : ＝でも俺めっちゃタメ語だ[よ＝]
- 6 G : [うん＝]
- 7 ? : =hh
- 8 D : んー(.)でだから一人でお祈りしてる時は：そんなに(.)
- 9 えこうなんだけどどうしようみたい[なことやるけ][ど]=
- 10 H : [hhh]
- 11 E : [hh]
- 12 D : ＝今日はどうかしてくださいって最後にさ
- 13 ちゃんとやっぱ敬語つくん[だよ最後に]
- 14 H : [でも確かに]そりゃそうだよね(.)
- 15 [うんそう(0.8)] ん：
- 16 D : [(B の方を見て))最後に敬語[つくの]
- 17 C : [() ください]
- 18 D : だから：° もう° 全部委ねます(.)みたいななん[か]
- 19 H : [たまに]してよって言う° けど°
- 20 D : [hh]
- 21 E : [hh]
- 22 C : [()]
- 23 D : でもお願いしますってその後に言わない？ ((H の方を見ながら))
- 24 (2.0)
- 25 C : そうとは限らん
- 26 H : ° ん：° まあ御名によってお祈りいたしますはやる(0.5)

- 27 [()] 決まり文句ってなっちゃったから俺の中で
 28 D : [()]
 29 >でも<それつけるじゃん(.)とりあえず一回敬語挟むじゃん(0.2)だからなんか
 30 H : ° うん°
 31 D : ((目線を斜め下に移して))>あでも<やっぱ：そういう：敬語使われる対象になるんだな
 32 って思って

まず D は 1～3 行目で「神は身近な存在である」という認識を示している。そしてその後 4 行目で D は神へ敬語を使用していることに触れ、ことば使いに関する言及、すなわちメタ言語に関する言及が行われている。しかし、それに対して H は 5 行目で、「自身は神へ敬語を使用していない」と述べ、D の主張への反論を行っている。反論に対し D は、8 行目で自身もタメ語を使用すると述べつつも、12 行目で「全文で敬語は用いなくても、部分的には敬語を使用する」と述べ、必ず神へ敬語を使用すると、再度主張を行っている。19 行目で H は再びタメ語を使用すると反論するものの、D は 23 行目でも継続して、必ず神へ敬語使用を行うと主張する。そして 26～27 行目で H は、神へ敬語使用を行うことを認め、D の主張を受容している。H が主張を受容したことを確認した後、D は 31 行目で「神は敬語を使用する対象である」という事実から、神が畏敬の対象であるとの認識を示している。

以上のデータでは、信者が神に語りかける際、敬語を使用することが重要であると示されている。時と場合によっては敬語を使用せずタメ語で神に語りかけることも了承されているが、決まり文句であれ、部分的には敬語を使用することが多いことが信者間で共有されている。また、示された認識に対する反応として、他の信者は初めは否定的な評価を示したものの、会話の中で肯定的な評価へと変化させている。

②考察

以下、データを元に、「宗教モラルティがいかに社会化されるか」「宗教アイデンティティがいかに社会化されるか」について考察を行う。なお、考察にあたり、上記のデータ 1・2 以外の会話の事例を紹介することもある。

(1) 宗教モラルティの社会化

データ 1 から、宗教モラルティの社会化について考察したい。

データ 1 では、参加者 H は「怒られる」という表現を用いて、神の働きかけを表現している。参加者である F へのインタビューで「神に怒られるとはどういう状態か」との質問を行ったところ、「聖書の中のある言葉が自分の心に刺さった時、神様に怒られたと感じる」との回答を得た。また牧師である A もインタビューで「すごく (神様に) 慰められることもあるし、励まされたりそういうこともあるし、逆に、それ違うんちゃう？ っていう風に示されるというか、それによって怒られるように感じたりそれで悔い改めに導かれたり、っていうこともありますよね。⁷」と述べている。信者は様々な受け身表現を用いて神からの働きかけを表現している。これらの受け身表現は、神が中心的な存在であるという規範意識と結びつく。特に「怒られる」という表現形式は、「神に『怒られる』ことをしてはならない」という規範意識と強く結びつく。

以上から、まず神の声を受け取るために、聖書というツールが重要であることが示唆される。そし

⁷ 牧師の言葉を直接引用で記載しているため、斜体。

て聖書の言葉を通して、神という人格から言葉を受け取り、自らの宗教モラルティを形成している。長さの都合上記載できなかったが、データ 1 の前後で「聖書を通して神様が怒ると怖いを知っているから、神様の言うことを聞こうと思う側面もある」「神は怖いだけではなく、全知全能なんだということを聖書を通して証明してる」というように、他にも神の言葉を通して自らの宗教モラルティが構築されていることを示唆する文言が見られた。

(2) 宗教アイデンティティの社会化

データ 2 に見られる会話の特徴から、聖書研究会における宗教アイデンティティの社会化について考察したい。

データ 2 に見られる特徴として、聖書研究会参加者が会話において自らのスタンスを明確に述べているという点がある。データ 1 では基本的に 1 行目～32 行目まで D がターンを保持している。聖書研究会での会話では基本的に牧師に指名された人間がそれぞれ自身の見解を述べていくが、特定の人物のターンが 10 分以上続くこともあり、保持するターンの長さから、自らのスタンスを明確に述べることの重要性が示唆される。

また、参加者達は会話を通して、新たな気づきを得たり、価値観を変容させたりしている。データ 2 において D は、2～4 行目において「神は自分にとって身近な存在である」という認識を示す一方で、神への敬語使用への言及を通じて 32 行目では「神は敬語を使う対象である」という認識も示しており、会話の中で自らの考えを修正している。すなわち、データ 2 において参加者は敬語の使用法というメタ言語に言及することで自らの宗教活動での適切な言語使用を習得し、そして同時に、言語使用の方法の確認を通じて神との関係性について考え、自己と神との関係性という宗教的なアイデンティティを獲得していると考えられる。

会話データでは他に、賛美や天国について、あるいは神を感じる瞬間について言及するものも収集できた。いずれのデータにおいても参加者は相互行為の中で互いのスタンスを明確にしながら、他者のスタンスを受容し自らの言語使用や宗教活動を見つめ直すという構造がみられた。

③まとめと今後の課題

聖書研究会での会話の分析を通して、2 つの知見が得られた。1 つ目は、信者が聖書を通じて神の声を受け取り、自らの宗教モラルティを形成していること。そしてもう 1 つは、会話を通して信者が各々のスタンスを明確にし、互いの価値観を受容し自らの宗教アイデンティティを形成していることである。Fader(2011)が述べたように、宗教を言語社会化の観点から分析することで、広く人々のモラルティやアイデンティティがどのように形成されるかについての考察を行う足掛かりになると考えられる。

また、今回の分析では聖書研究会での会話データを主な分析対象としたが、礼拝の時間や教会学校等、教会内での宗教教育に関わる活動は他にも存在する。宗教の社会化について概観するには、更に教会学校や説教等のデータを分析する必要がある。今後の課題としたい。

【参考文献】

文化庁「宗教年鑑 平成 30 年度版」 (最終閲覧 2019 年 12 月 3 日)

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/pdf/h30nenkan.pdf

小栗献(2007)「よくわかるキリスト教の礼拝」キリスト教新聞社

- Fader, A. (2011). Language socialization and morality. In A. Duranti, E. Ochs & B. B. Schieffelin (eds.), *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Blackwell. pp. 322-340.
- Moore, L. (2011). Language socialization and repetition. In A. Duranti, E. Ochs & B. B. Schieffelin (eds.), *The handbook of language socialization*. Malden, MA: Blackwell. pp. 209-226.
- Moore, L. C. (2006) Learning by heart in Qu'ranic and public schools in northern Cameroon. *Social Analysis: The International Journal of Cultural and Social Practice* 50. pp.109-126.
- Moore, L. C. (2008) Body, text, and talk in Maroua Fulbe Qur'anic schooling. *Text & Talk, Special Issue: The Spirit of Reading: Practices of Reading Sacred Texts* 28. pp.643-665.
- Ochs, E. (1990). Indexicality and socialization. In J. W. Stigler, R. Shweder, & G. Herdt (Eds.), *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 287-308.
- Schieffelin, B. & Ochs, E. (1986). Language Socialization. *Annual Review of Anthropology*, 15, pp.163-246.

【参考資料】

会話データ内で使用する記号表

。	下降調のイントネーション	?	上昇調のイントネーション
、	平らなイントネーション	> <	この2つの記号で囲まれた発話の部分の速度が速いことを示す。
。。	この記号で囲まれた発話の音が周 りより静かなとき	:	音が伸ばされている状態を示す。一つ の「:」は約 0.1 秒を示す。
-	音が途切れている箇所を示す。	下線	強調されている部分
h	呼吸音や笑いなど	[]	2 人以上の参加者の発話の重なりを 記す。
=	発話と発話が途切れがなくつなが っている箇所を記す。	(0.2)	0.2 秒から数えた沈黙の長さ
(.)	0.2 秒以下、非常に短い間合	(())	筆記者のコメントや参加者の非言語 行動などを二重丸括弧の中に入れる
()	不可能または不確実な部分を囲む		